

特集・都市の魅力—第三の生活空間⑤

# 生活の中の自由時間と第三の空間

国吉直行

## 一——週休二日制後の我々の生活

昨年度から多くの公的機関や企業は週休二日制を採用している。

週休二日制によって生まれたこの二日の休日それぞれの人はどうのように活用していくのか。この二日間は、基本的には職場と切り離された時間であるが、職場帰属型の生活に慣れ親しんで来た我々日本人は、突然現れた週休二日制によるこの二日間の休日を活用することにとまどいを覚え、それぞれの創造的個人活動に十分活用出来ていないというのが一般的な状況ではないだろうか。

そもそも日本における週休二日制採用は、週

休二日制や長期休暇などの社会システムの定着している欧米を中心とした先進諸国に比較され、年間労働時間の極端に長い日本の実情を象徴的に表していた週六日間労働制を週休二日制採用という形で変更し、先進国と、この面だけでも足並みを揃えようとして出発していると思われるが、これまで、多くの方から日本におけるこれまでの職場と個人生活の関係についても見直すべきという問題提起がなされて来ており、週休二日制採用は、このような問題提起に対しても我々各人が自ら考える機会とすべきことのようにも思える。

- 生活時間に関するアンケート調査（「生活時間の実態と芸術文化に関するニーズ調査」）
- 一——週休二日制後の我々の生活
  - 二——第三の生活活動
  - 三——劇場の幕間時間やギャラリィでの出会い
  - 四——楽しく自主的に学ぶ人々
  - 五——スポーツ人口の増大
  - 六——消費享楽型空間で過ごす時間
  - 七——子供達にとつての第三の活動
  - 八——個人社会マレーシアでの英国型生活の体験
  - 九——一日に三度洋服を着替える生活
  - 十——ペナンのもう一つの第三の空間
  - 十一——多様な価値の共存する都市へ
  - 十二——個人の創造性を高める都市空間づくりへ
- 平成五年三月発表。神奈川県・横浜市・川崎市 共同実施）の結果を見ると、現在の我々の生活は次のようになっている。
- ①平日において勤務時間が極端に長く、自由時間は短い。特に、本来自由時間が多くとれそうな独身勤務者の勤務時間が長く、平日の自由時間がほとんど無い。
  - ②平日の自由時間における付き合いは、仕事に関するものと個人的なものに分けると、男性は仕事に関するものが多くを占め、女性は個人的なものが多くを占めている。
  - ③男女区別なく週全体の自由時間の約四〇％をテレビ視聴に使っている。
  - ④土日に多い自由時間の使い方テレビ視聴以

表一 性別の余暇活動平均時間

	男性			女性		
	平日	土曜	日曜	平日	土曜	日曜
自由時間行動計	3.20	6.15	8.22	4.21	5.29	5.58
社会参加	0.04	0.03	0.05	0.08	0.18	0.08
仕事のつき合い	0.10	0.03	0.01	0.01	0	0.01
個人的つき合い	0.06	0.29	0.25	0.25	0.26	0.32
家族との対話	0.11	0.1	0.16	0.17	0.17	0.13
電話・手紙	0.01	0.01	0.01	0.07	0.04	0.07
学習(資格の勉強)	0.12	0.14	0.19	0.09	0.09	0.12
見物・鑑賞・映画	0	0.09	0.21	0.05	0.14	0.41
行楽・散策	0.01	0.20	0.27	0.04	0.09	0.21
スポーツ活動	0.08	0.17	0.25	0.06	0.09	0.09
勝負ごと	0.07	0.22	0.15	0.01	0.07	0.02
稽古ごと・芸術文化活動	0.01	0.04	0.01	0.07	0.06	0.04
その他の趣味	0.08	0.27	0.23	0.13	0.22	0.11
テレビ	1.32	2.23	3.29	1.48	2.03	2.11
ラジオ	0	0.01	0.02	0.01	0.01	0
新聞	0.09	0.12	0.14	0.11	0.12	0.10
雑誌	0.01	0.02	0.04	0.02	0.04	0.04
本	0.09	0.19	0.31	0.09	0.15	0.14
マンガ	0	0	0	0	0	0
レコード・CD	0.01	0.07	0.09	0.01	0.03	0
ビデオ	0.01	0.06	0.08	0.03	0.05	0.06
休息	0.16	0.28	0.44	0.2	0.25	0.31
その他の自由行動	0.01	0	0.03	0.01	0.01	0.02

出典 「生活時間の実態と芸術文化に関するニーズ調査」神奈川県、横浜市、川崎市(数値は時間・分)

外の主要なものは、男性では、休息、読書、行楽・散策、個人的つき合い、スポーツ活動、その他の趣味、見物・鑑賞・映画、学習の順となっているが、女性では、見物・趣味・鑑賞、個人的つき合い、休息、行楽・散策となっており、男女の生活スタイルに差異が見られることがわかる。男性高年齢者を中心に多くの人が、テレビ視聴に多くの時間を費やしているが、中には

テレビ視聴時間を減らして、他の行為に使っている人もいる。  
アンケート調査結果の分析で述べられていることも関係づけて考えると、我々の生活は今、週休二日制が始まったばかりで、ほとんどの人が、週休二日制の中で新しい生活の組み立てまで至っていないのが実情であろうと思われる。戦後の日本で培われて来た長時間労働と職場帰

属型生活を、急に欧米型生活に方向変換することは不可能なことであり、週休二日制となっても平日の残業は相変わらず続き、我々の生活パターンはあまり変わりそうもない。しかし、今後、終身雇用制や年功序列制にも変化の兆しが見られる中で、職場に帰属する行為以外の個人的行為にももっと時間を費やす人が増えて行くと思われ、平日、土日にかかわらず自由時間の活用はそれぞれの個人の課題となっていくと思われる。

## 二——第三の生活活動

前記アンケートの分析によると、多くの市民は、職場従属型の生活をしており、また主婦を中心に、女性に負担のかかっている家庭での生活について、家事を主として犠牲を伴う行為とみなしている傾向が強いとしている。

こういった中で、自由時間の増大がはかられば、各個人は、まず最初に家庭生活の充実に時間を費やすことが考えられる。

しかし、犠牲を払う場所としての家庭に費やす時間を補うだけの生活の変化は創造的でなく個人的満足感を得られないのではないだろうか。職場、家庭はどちらも定型化した生活であり、またどちらも一つの共同体のルールの中で自己

表一 自由時間（男女・年齢別・学歴別）

	平日			土曜			日曜			
	平日	土曜	日曜	平日	土曜	日曜	平日	土曜	日曜	
男	10代	6.30	7.43	8.44	男	学生	6.43	8.11	8.18	
	20代	3.27	5.46	6.55		小・中学校卒	4.15	3.57	7.30	
	30代	2.20	5.38	7.58		高校卒	2.49	5.55	8.28	
	40代	3.00	5.53	8.40		性	短大・高専・ 専門学校卒	2.39	6.07	8.04
	50代	2.52	6.45	9.25				2.57	6.41	8.41
	60代	4.37	7.24	9.08				大学・ 大学院卒	2.57	6.41
女	10代	5.05	6.29	8.39	女	学生	5.03	6.53	9.01	
	20代	3.23	5.17	6.02		小・中学校卒	4.42	5.45	5.46	
	30代	4.35	5.11	5.47		高校卒	4.13	5.12	5.28	
	40代	4.23	5.24	5.25		性	短大・高専・ 専門学校卒	4.31	5.21	5.53
	50代	4.19	4.49	5.38				3.25	5.32	5.32
	60代	5.24	6.57	5.58				大学・ 大学院卒	3.25	5.32

出典 「生活時間の実態と芸術文化に関するニーズ調査」神奈川・横浜市・川崎市（数値は時間・分）

を押さえながら生活している。今後、我々の生活がより人間的になるとすれば、それにはもっと各個人がこういった共同体から解放されて一人の人間として自由に発言、行動出来る時間を持つ必要がある。定型化している職場や家庭の生活と無関係な時間は、職場や家庭の生活で得られない非日常的なものを求めることに使われるかも知れない

し、全く独自の新しい人間関係を築くのに使われるかも知れない。それこそ多種多様な個人的活動となるであろう。我々日本人はこれまで個人的な生活活動を持つ時間的余裕を持っていなかった。その結果、考え方や生き方において個人としての自立したものを育てることが出来ていなかったようである。

このような日本人が最も補わなければならない個人的活動を第三の生活活動とし、ここでは、我々の今後の生活における第三の生活活動の可能性について述べてみたい。

### 三——劇場の幕間時間やギャラリーでの出会い

個人的興味や付き合いから、時々、演劇などを見に劇場へ出掛けたり、都市や建築のデザイン展を見にギャラリーを訪れる。多くは、東京の劇場やギャラリーであるが。

演劇などに出掛けると幕間休憩の十五分ほどの時間は、面白い時間となる。知人とはばったり出会うこともあり、コーヒーを飲みながら短い再会の一時を過ごすことが出来る。また、人を紹介してもらうこともある。今見た演劇を話題とした会話をすることも。何かの予定を打ち合わせる場となることもある。

展示会のオープニングの日は、展示作家や主催者をはじめ、多くの関係者が集まる。ここに行くくと展示作品を見るとともに多くの人と会うことが出来るのが魅力である。普段忙しい人々が、時間をさいて集まりこの時ばかりはくつろいで会話をする。

先日、仕事の後、緑区青葉台にオープンした区民文化センター「フィリアホール」にスイス

の楽団のコンサートを聴きに出掛けた。コンサートの途中の休憩時間に多くの人とあいさつを交わすことが出来た。また、東京から聴きに来ていた知り合いの大学教授を発見し、コンサートに誘って夕食をし、久しぶりに楽しい一時を過ごした。

あらためて考えると、こういった文化的施設は演劇、コンサート、展覧会などを見に、聴きに行くだけでなく、人と出会う場所でもある。共通の興味を持った人々が集まる場であり、当然会話も行われやすい。したがって、ラウンジや喫茶コーナー、レストラン、バーなどの付帯施設は実はこういった人々が触れ合う機能を持つ場なのであろう。

イギリスの庶民的施設として有名なものがパブといわれるバーであり、一般の労働者にとっては仕事の後に四百円ほどのビールを一杯だけ飲みに行く場所となっており、ここでいろいろな知人とも会い会話することが出来ると言われている。

日本では、仕事の帰りに酒を飲みに行く時は、ほとんど仕事の仲間というのが我々の習慣となっているし、コンサートなどにもめったに出掛けない。日常的に偶然の出会いの起る機会の少ないのが我々の生活である。異なる立場の人とも日常的に気楽に会話する機会を作ることも我々

の今後の課題ではないだろうか。

なお、先のアンケート調査によると「見物・鑑賞」は、横浜市民においてはわずかであるが活発であり、土、日に川崎市の二倍の市民が参加している。

#### 四——楽しく自主的に学ぶ人々

近年、各地域で市民グループの自主的な学習会や、行政主催の講習会、民間のカルチャーセンター活動などが活発に行われるようになってきた。これらは、学習意欲の旺盛な市民にとって、個人的な世界を築くための貴重な空間となっている。

こういった講習会やカルチャーセンターの最近の講座の特徴は、大学などには無い切り口の講座も多いというところに特徴がある。

例えば、横浜朝日カルチャーセンターの講座を見ると、一般的な語学、美術、書道、音楽、演劇、生け花などのコースのほか、心とからだのコース・夢分析入門、日本を考えるコース・旅と遊学、ボランティアアコースといったコースもある。

ここでの学習は、大学のように卒業することによって資格を得るといったものではない。したがって、参加者はあくまでも個人的興味だけ

で参加している。大学などと違って、全てのカリキュラムへの参加が強制されることもないし、あくまでも個人的に選択し参加を決めることが出来るのが特徴である。

こういった講習会は、職場や家庭とは無関係な新しい友人を作る場ともなっている。したがって、友人を作れるような楽しいコミュニケーションの工夫がされているものが歓迎される。

情報媒体の発達した現在であり、様々な新聞・雑誌・テレビ情報などから、時間的・費用的側面・講座の楽しさ等を勘案して自分の参加したい学習の場を自由に選択することも出来る。

私の知っている主婦はいろいろな形の英会話の学習会を見つけて参加するが、ある時期は根岸の米軍キャンプの米軍主婦が講師となって主催する学習会に参加していた。ここでの特徴は、米国人の家庭料理と一緒に料理したり、時々キャンプ内で開かれる、アメリカンスタイルのパーティーにも参加し、多くの米国人と会い、雑談をすることが出来る面白さがあると言っていた。またある時期は、区主催の外国人との交流会に参加していたし、またある時期は、川崎市主催の英会話教室に通っていた。川崎市の教室も在留外国人との特別な交流の工夫がされていたという。

英会話を学ぶに際し、同じカルチャーセンター

で連続して学ぶことも可能だが、このように学ぶ場所を自分の好きなように変え、いろいろな人と触れ合い、様々な空間で体験をしながら学ぶこともこのような個人的学習では可能である。

港北区で十五年以上続けられている「篠原セミナー」は、主婦を中心とした百名近い女性の参加する学習会であるが、もともとこの地域の意欲のある女性によって自主的に開催されてきたもので、すべて自分たちで運営委員会をつくり、年間テーマを決め、年十回のセミナー参加者を募集し、著名な講師への講演依頼交渉も自ら行い、破格の講演料で講演してもらってきた。自分達の力で、自分達の満足するカリキュラムの学習を、安い費用で継続的に運営している横浜では珍しい先駆的活動である。

彼女達の活動の場は、地区センターなど地域の廉価な会議スペースであるが、百人が集まる会議室が得られにくいことなどが課題となっており、今後市民の自主的活動が活発になっていくと思われる中、こういった活動の拠点の空間の確保が重要になってくる。「横浜洋館探偵団」という女性を中心とした市民グループがあるが、このグループは、もともと横浜に残っている西洋館を楽しく勉強しようという趣旨で集まった市民グループである。最近では「横浜フランス瓦物語」という本を自費出版をしたり、関内や

山手の洋館見学ツアーを開催したり、他の多くの市民の方々にも西洋館や横浜の歴史に親しんでもらおうと様々な活動を活発に行っている。このグループにとっての学習・活動の空間は、街そのものである。

横浜市郊外部には多くの自然が残されているが、ここを舞台に自然、野鳥などの観察・研究を続けている市民グループも数多くある。

個人的なテーマを持って楽しく学ぼうとする人は増え続けている。こういった人々が集合して、「篠原セミナー」や「洋館探偵団」のように自主的に企画し学ぶこともあり、また社会的活動につながって行くこともある。

東京で設計事務所を営む私の友人は、十年前前に新橋の駅近くのビルの一階に十五人程の全く分野の異なる同世代の人々と金を出し合って会合の拠点を構えた。「都市小屋」という名称で、ここには、簡単なバーと会議スペースがある。バーの面倒をみる人も雇い、一般客も入れるバーとしても成立させ、一方で会議室では、いろいろな分野の研究会や会合がもたれる。毎月の研究会などの予定表が張られており、いろいろな分野の会合に参加することが出来るし、ふらっとバーによって馴染みの人と顔を合わせることもできる。

個人としての学習と交際範囲を広げることが

同時に行える機能を持った場として面白い。

## 五——スポーツ人口の増大

同じ生活時間のアンケート調査によると、横浜市では約一割の人が、土、日にスポーツに参加している。私の個人的見方をはるかに越えた人々がスポーツに参加していることがわかり驚いている。

バレーボール、野球、テニス、水泳、ゲートボール、サッカー、アスレチックなど市民スポーツも多様化している。

単に健康のためという段階から、交流試合への参加までスポーツを通しての楽しい地域の人間関係やコミュニティづくりが進んでいるのを感じる。

私の住む栄区でも、民間主催、区主催など様々な形のテニスの交流試合が年間十回位も行われ、テニス歴の浅い人も含め多くの人が参加している。

スポーツは、体を鍛えることを目的としていることは言うまでもないが、そのほかに、様々な試合などを通して、日常では得られない闘争といった行為を行えるし、また職場や家庭とは異なる知人を作る楽しさもある。

## 六——消費享楽型空間で過ごす時間

芸術文化活動・鑑賞、地域での学習、スポーツなどといった行為が居住地周辺で増えつつある中で、中心市街地周辺に多く存在している消費享楽型施設はすでに一定の伝統すらできた日本型娯楽空間として大きな世界を形成している。バー、キャバレー、ディスコ、カラオケボックス、パチンコ店など多種多様であるが、その多くは日本的な独自の空間として成長し、現在多くのアジア主要都市にも見られる施設となっている。

仕事に従事する時間の長い日本独自の生活の中で、消費享楽的施設として成長したものと比べると、そこへ出掛ける行為の多くは職場の延長的性格を持っており、職場の連帯感の形成には役立つが個人の創造的活動につながる第三の活動と言えるかどうか難しい。

## 七——子供達にとっての第三の活動

学校生活、塾通い、スポーツ教室など全て大人たちの用意した活動の中に押し込められてしまっている子供達の生活にも自由時間の増大はおこるのであろうか。

もし自由時間の増大が起これば、彼らはどこ

で何をするのであろうか。

我々の子供の時代にあった路地や空き地での遊びや、野山や危なそうな所への探検などスリリングな行動は、現在の子供達にはない。安全な公園で遊ぶか、ゲーム機に熱中することがほとんどである。

子供達も個人としての興味を発見したり、スリリングな体験をすることは人生に楽しさを感じさせる上で重要であるとおもわれるが、このような点から考えると子供達の第三の活動を支える仕組みは貧困のように思える。

## 八——個人社会マレーシアでの英国型生活の体験

五年ほど前、私は、横浜・ペナン技術職員交流星業の一環としてマレーシア・ペナン市役所に三カ月間勤務した。ペナン市で私に課せられた課題は、三カ月という短い期間に、ペナン市職員の協力を得て、都市デザインの観点から、ペナン市中心部ジョージタウンの整備計画を作成し、市議会で発表・提案を行うものであった。このように一定期間同一都市に滞在し、ペナンのプランナー達と生活をともにする中で、日本での我々と異なる彼らの生活に多くの驚きと一部うらやましさを感じた。

英国によって作られたこの都市には、十時か

ら一時まで働き、一時から三時まで食事休憩し、三時から五時までまた働き、それで一日の会社の生活は終わりという英国人の生活を感じさせる生活スタイルを推測させるものが現在も残っており、生産性を重んじる日本には将来とも決して根付かないと思いつつも参考までに体験したことを紹介する。

マレーシアにおける個人と組織の関係は、欧米と同じである。

つまり、日本のように完全な終身雇用制度ではない。個人は、その学歴・経歴・社会的評価などを含めた能力によって評価され、評価に応じて働く場所を自由に移動することが出来る。組織は個人を採用した時から、評価とおりの能力があるものとみなし、組織として教育をほとんどしない。ましてや、組織の先輩が後輩を育てるといったことは無い。同じ目標に向かって共同で働いている組織の上司と部下が同一の考えを持つことが強制されない。先輩から順に出世することが慣習となっているわけではない。

こういった社会では、自分を築くのは自分しかない。職場での仕事のしかたや、生活の楽しみ方の日本での我々と異なる面があるのはこのような社会構造の特徴による影響であろう。

ペナン市役所の職員は、概ね三つのランクで雇われるようである。私が属した総合計画室に

も、計画策定に参画する上級職員であるプランナーと、その指示の下で図面作成などを行う中級技術職員ドラフトマンがいた。プランナーとドラフトマンは、初めから雇われ方が異なり、どんなに頑張ってもドラフトマンはプランナーにはなれない。

私が仕事を進めるうえで日常議論するのはプランナーであり、ドラフトマンは、私の仕事を手伝うだけであった。

プランナーは、ドラフトマンと仕事の本質的な面について議論することは一切しないし、個人的会話もほとんどしない。

私は、プランナーと位置づけられていたため、仕事の面でも個人的交際でもプランナーとだけ交流がほとんどであった。

ペナン市は、マレーシアでも特殊な都市である。まず、都市を築いたのがイギリス人であり、長いイギリス統治下で、支配階級としてのイギリス人が、英国の生活・文化をそのまま持ち込んだ都市であった。また、人口の六割を中国系市民が占めており、かつてのイギリス人にかわって現在、経済・行政のリーダーとなっていることも特徴である。

都市内には、多くの英国風の石造建築物が残されており、市の中心部には、広い範囲にわたって中国人街が広がっている。このほか、少数の

イスラム系マレー人や、インド系市民も住み、イスラム寺院、ヒンズー、仏教の寺院も点在している。

ペナン市は、個人社会であるとともに、他民族社会でもある。市職員もこのことを踏まえて生きて行かなければならない。

### 九——一日に三度洋服を着替える生活

市役所の就業時間は八時から四時過ぎまでである。就業時間が来ると全ての職員が一斉に帰

宅する。残業をすることは全く無い

日没が七時三十分前後であるこの都市においては、一旦帰宅してから、まだ明るい中でいろんなことができる。私の友人である中国系プランナー（三十代半ばの独身男性）MR・リムは、ほとんどの日、一旦帰宅した後、テニスか水泳またはスカッシュに出掛けていた。私も時々連れて行ってもらっていた。彼らの行く場所は、

会員制のクラブである。ペナンは観光地であるため、豪華なホテルも数多くあるが、ペナンの一定階級以上の人々は、いくつかの会員制クラ

ペナン市ジョージタウンの市街地—対岸はマレー半島



米國統治時代につくられたタウンホール（旧市役所）



ペナン市に多く見られる屋外の食空間



ブに属している。このクラブには、テニス、水泳、スカッシュなどスポーツの場があり、また、この他にレストラン、ホール、談話室などもある。こういった施設の大半は、イギリス統治下にイギリス人のために作られたものである。中国系人専用のクラブもある。四時過に仕事を終え帰宅し、クラブなどに出掛け五時ごろから一時間半ほどスポーツに興じ、一旦また帰宅する。そして、八時頃、約束した友人達と、約束の場所ですぐ夕食をする。この食事は決して贅沢な所ではない。多くはペナン市の路上や、広

場に夜間開店する露店であった。家庭のある人は、夕食には、家族と出掛けることが多い。四時過ぎに、仕事が終わった後、職場の仲間と職場での服装のまま連れ立ってどこかに出掛けるということはない。原則的に職場の仲間とは、四時過ぎ以降は交際しない。四時過ぎ以降は、自分なりに作ったいろいろな職業の仲間との交際をする。スポーツをする時もそうであるし、夕食をする時もそうである。スポーツをする時の友人と夕食をする時の相手とが同じということも少ない。こういった中で、自分なりの研究活動や研究会などへの参加もするし、いろんなパーティーへの参加もする。コンサートなどに出掛けることもある。しかし、こういった様々なものへの参加は職場の交際とは関係なく行われるものが殆どである。

彼らには、一日に三つの生活があった。職場での四時過ぎまでの時間、五時から七時頃までのスポーツ、レクリエーションの時間、八時頃からの友人・知人との夕食の時間。三つの時間にそれぞれに合った別の服装で出掛ける。彼らは毎日、その日の五時以降の時間をどう過ごすか考えておかなければならない。予め予定を立て、約束を取り交わしておかないとスポーツや食事の相手がいなくて困ってしまうことにもなる。私も、食事をしようと思った相手が既に他

の人と約束済みのため誘うことが出来ず、一人で寂しく食事をしたことが何回もあった。MR・リムは、自然や歴史的資産の保存問題に強い興味をもつプランナーであったので、時々、こういったことを考えている別の職場の人達との研究会に参加したり、主催することも個人的活動として行っていた。こういった研究会には、弁護士・裁判官、学者、ジャーナリスト、建築家など多様な人が個人の立場で参加していた。

彼らは、自然保護協会、歴史資産保存協会といったものを結成し、社会的運動も行っている。こういったMR・リムの生活は、個人社会であり、階級社会であるイギリスの知識階級の人々の生活そのものに近いものではないかと考えた。こういった社会では、自分独自の価値観に基づいた個人の生き方が重要となり、職場とは別の個人的な研鑽や研究が必要であり、社会運動などを行う仲間を持つことが必要であり、また遊び仲間も独自に作らなければならない。そのような様々な個人的行為の場のひとつとして、多様な活動の行える機能を持ったスポーツ・会合・食事・娯楽・休息の場となっているペナンのクラブのような施設は重要な役割を持っているのだと思われた。

十——ペナンのもう一つの第三の空間



クラブが英国人由来の知識階級の個人的活動拠点の一つであるとするならば、一般市民にとっての個人的活動の場として重要なものは、夜の道路上屋台群である。

夜六時すぎから海岸部のエスプラナードという名称のプロムナード、ガーニードライブという海岸道路をはじめ中心市街地の多くの道路には毎晩屋台の食堂が並ぶ。衛生的には問題がありそうであるが、ペナンの一般市民にとって、ここでの食事は、知人や家族との会食の場として日常的な場となっている。この屋台食堂群は真夜中まで営業しており、夜の街の賑わいの場ともなっている。

見事な点は、毎晩このように賑わう屋台の跡が次の日は痕跡も残さずきれいに片付けられている点である。

道路管理者との合意の元に、道路空間が見事に時間帯によって使い分けられ、夜間は市民にとっての楽しい空間に生まれ変わる。

### 十一——多様な価値の共存する都市へ

昨年三月、横浜では「都市のクオリティ」をテーマとしてヨコハマ都市デザインフォーラム国際会議が開催され、現在の都市の課題を議論した。

この中で議論で、日本は、戦後の教育の均一化、一極集中、生産性の向上のなかで、日本全国の都市化と地域文化の崩壊がなされてきているが、今後、欧米だけでなくアジア各国との交流も活発になって行く中で都市の課題の一つとして「異質なものの、多様なものたちとの共生」（多様な価値の共存）が唱えられている。

日本の都市づくりは、欧米の都市づくりを参考としながらスタートしたが、欧米の都市とは異なる都市として育っている。ニュータウンづくりなど個別的には欧米のものに似た空間も形成されているが、効率性や生産性を重視するあまり、均一化・集中化が進められ、職場社会を重視した作られ方となってきた。日本独自の消費享楽型産業も発生させて来た。

今後、生活時間の構成が変化して行く中で、職場帰属型一辺倒の生活から徐々に個人帰属型の生活時間の増大が見られるようになると思われる。こういった状況の中で、個人帰属型生活が欧米のようにまず家庭生活の充実といった点から構築されるのか、家庭と離れた個人的行為の充実といった形から進むのか興味深い。

都市生活の楽しさは、多様な価値、多様な人、多様な空間との遭遇であり、均一化して見える郊外部などでの生活にも今後多様化が進むことになるであろう。現在、結婚式や同窓会などの

時だけドレスアップして出掛ける中心部のホテルのような施設などが郊外部においても個人的交際の場、非日常的体験の場として利用されるようになるかもしれない。消費享楽的施設が郊外部にも増えるかも知れない。

青葉台のフィリアホールのような区民文化センターも増えると思われるが、今後市民活動の多様化が進み、スポーツ・レクリエーション施設や集会施設、その他もっと多種多様な施設が求められるようになると思われる。

こうして考えると、テニス・水泳などのスポーツ施設を持ち、レストラン、多目的小ホール、会議室など様々な施設で構成されたペナンのクラブは、個人的コミュニケーションの空間として非常に利便性が高く、様々な気楽な出会いの出来るコンパクトにまとまった空間であった。

百年以上も前に作られたペナンの施設から英国人の都市生活の工夫を再度勉強させられた思いがする。

### 十二——個人の創造性を高める都市空間づくりへ

日本においては、住宅から道路、公園、その他の公共施設まで都市におけるあらゆる空間が、単一機能に対処して作られている。

住宅においては、個室と共用スペースがはっ

きりと分離され、狭い空間の中のむだの無い三LDKといった部屋構成が定着してしまった。

こういう構成により個々人のプライバシーが守られるということは得られたかもしれないが、これではリビングダイニングという場しか家族の交流の場が無く、また個人的空間は四角形の個室一つだけであり、全ての家族が画一的な関係に追いつ込まれ、個人的空間も全て同じになってしまったということも事実である。

三LDKというのは、家庭生活を営む空間を狭い空間の中になんとか押し込めるための最低の空間づくりであったはずであるが、これが一般的なものとして定着してしまった。

自分の家の中で自分の特に愛着のある気に入った場所などといった昔の日本家屋にあったもの不思議な空間は、現在の無駄なく構成された住宅には無い。

車や歩行者の動く機能にだけ対応して作られる道路やそこでの活動を最初からパターン化して近隣公園・児童公園などと設計基準に沿って建設される公園の作られ方や使われ方も同様である。

学校やさまざまな公共建築の作り方も同様である。

全てが、単一の活動機能に対応して無駄なく配置・構成され、予め設定した活動以外のもの

は受け入れにくい作られ方をしてきた。

最近、港灣部の倉庫などを一時的に利用して芸術イベントを開催する例が増えつつある。

演劇を行うのは劇場で、美術展示を行うのは美術館でというのがこれまで当たり前とされてきたが、芸術家側は必ずしもこれと同意見ではない。むしろ劇場や美術館以外の、都市空間の中のいろんな空間に出て行って活動することが、芸術家サイドにとっては非日常的であり、創造的と考えている。

これまでに述べた個人的活動・第三の活動が活発になろうとすると、この時間問題になるのが都市や施設の作られ方とその運営管理である。

創造的な第三の活動は今後多種多様になって来ると思われる。時代とともに変化して行く部分も多いだろう。

多様な使われ方に対応出来た昔の畳とふすまの住宅、子供と大人の多様な遊びやイベントに対応出来た昔の都市に多くあった空き地、こういった空間はその使い方・運営が自由であった。

このような空間利用が現在では欠如しつつある。こういった事が起こっても対応出来るような施設の作り方と運営があらゆる面で必要であるし、単一機能的・目的的に無駄なく作るのではなく、時代に応じた使われ方も許容出来る多機能対応型空間、無駄な空間が都心部、郊外部と

もに必要となって来る。

また、港の倉庫での芸術活動のように施設の本来の利用目的を越えた過渡的使われ方は今後ますます重要になって来るし、このような利用を許容出来る柔軟な運営体制が必要になって来る。

公立学校の校舎や校庭の休日一般開放などももっと大幅に進めるべきであるし、公園や道路などの作り方や利用についてももっと柔軟に対処すべきかもしれない。

将来の市民の創造的活動の全貌が予測出来ない現在、将来の活用に備えて出来るだけ無駄な公的用地を確保しておくことも重要である。

市民の第三の活動が活発になれば、ペナンのクラブのような、あるいは新橋の「都市小屋」のような施設が、市民自ら、あるいは民間企業の手によって作られることも増えるであろう。

立派な地区センターでなくとも古い建物などを利用した小さな市民の活動拠点なども効果的である。

日本の都市生活者が真に自立した都市市民として生き生きと生活して行くためには、これまでのような硬い都市の作り方から柔らかな都市の作り方へ方向転換することも必要である。